

【今年度の取組と自己評価、達成度、課題と対策】

(1) 教育活動の目標と方策

項目	目 標	取組と自己評価	達成度	課題と対策
学習指導	① 地域と連携した活動を取り入れるなど、総合的な探究の時間の3年間の全体計画を立て、探究力や社会力を身に付けられる取組を推進する。	生徒、保護者が90%以上、教員が80%以上ともに教育活動のねらいを理解し、学習に臨んでいる。一方で個別最適な学びを望む生徒もいる。	A	1年次から4年次までの「総合的な探究の時間」の内容について、更にブラッシュアップしていくための検討を行う。
	② 生徒の実態を踏まえ、分かる授業を展開して基礎学力の定着を図るとともに、生徒の学習意欲を高める。	多くの教科でICT機器等の視聴覚教材を活用した授業を行ってきた結果、生徒の理解度が向上し、3者とも、80%以上の満足度を示している。経年比で、生徒の肯定的な意見が増加しており、90%以上の生徒、90%以上の保護者が、本校に入学し、基礎学力が定着してきていることを実感している。	A	一人一台端末の活用について検討し、学習意欲を喚起できるように、全定合同の授業力向上研修を行うなど、更なる授業改善を行う。
	③ 観点別学習状況の評価の趣旨を踏まえ、授業のねらいを明確にし、振り返る場面を設定して評価を行うなど、観点別学習状況の評価を確実に実施し、授業力の向上を図る。	新教育課程の実施に伴い教育課程、グランドデザイン、ループリックの確認、観点別評価について徐々に教員の理解が得られてきた。	B	学習意欲を高めることが出来るよう、各教科全体で授業の工夫を行う。また、授業力向上のための研修を行い、観点別評価について検証を行う。
	④ 全教員がチャイムで授業を開始するなど授業規律を確立し、生徒が集中して学びに向かう環境を整える。	教員の肯定的な意見が高く推移している。今年度は例年以上にメンタル面に課題を持つ生徒の割合が高くその対応や、発熱者等の早退対応等で時間通りに授業に向かうことができないケースが例年より多くなっている。生徒に関しても経年比で高く推移している。上記	B	個々の生徒の状況を把握しながらも、できるかぎり全ての授業において規律を確立し集中して学べる環境を整えるよう指導を進める。遅刻常習者に関しては、適切な指導を施していく。

			の理由以外で、一部の遅刻常習者を除き、授業開始時間には授業を受ける体制が整えられていることが分かる。		
	⑤	生徒による授業評価を活用した情報共有と全定合同の相互授業参観・研究授業や研究協議により、授業力の向上を図る。	今年度も全定合同の授業相互参観を行うとともに、授業評価に見られる傾向を分析し、多くの授業で改善傾向が見られた。	A	教科主任会を活性化し授業評価を確実にフィードバックできる仕組みを構築する。
	⑥	実験・実習の実施など生徒の興味・関心を高める体験的学習の実践により生徒の主体的な学習活動の充実を図る。	理科、「総合的な探究の時間」、英語等において積極的に体験的な授業を行った。	B	教科横断的な授業となるよう、多くの教科で体験的な学習を取り入れていく。
	⑦	アクティブラーニングを取り入れた授業実践により、生徒の学びに向かう力、コミュニケーション力や表現力の向上を図る。	グループでの協働学習や意見交換をする場面を積極的に設定し取り組むことができた。	A	引き続き主体的にかつ積極的に意見を表明し、考える場面を設定することで、生徒の力を培う。
生活指導	①	新しい日常」に基づいた基本的生活習慣の確立と、規律・規範意識の育成を図る。	教員、生徒の肯定的な回答が上昇してきている。	B	引き続き、生徒が意欲的な学校生活を送ることが出来るように挨拶指導を継続する。
	②	生徒が安心して学校に通い、積極的に学習に取り組める安全な学習環境を整え、中途退学者を減らす。	教員、保護者の肯定的な回答は 100%に達した。肯定的な回答のうち、「そう思う」と回答している割合は、生徒、保護者ともに増加しており、必要性の高い生徒の割合が高くなっている	A	S C、Y S Wの敷居を下げて、更なる相談体制の充実を図っていく。
	③	担任・保護者との連携を密にすることで、欠席・遅刻・早退等きめ細かい指導を実施する。	生徒、保護者とも経年比で肯定的な意見が向上している。連絡なく遅刻・欠席している生徒の保護者には連絡を入れ、生徒の状況確認とともに、家庭と連携して生徒を見守る活動が浸透してきているためと考える。	A	引き続き、家庭と連携した基本的な生活習慣の確立に努めていく。。

	④	体力テストや安全指導など心身の健康増進に向けた組織的・計画的な取組を実施する。	保体科、生活指導部や養護教諭を中心として、各教科や学校行事において取組を行った。	B	生徒が自己の体力について興味関心を示し、体力テストの結果を更新する意欲を高めていくよう、更に働きかけを行っていく。
	⑤	毎日の校門・昇降口指導による挨拶や授業の開始時と終業時における挨拶指導を励行し、また職員室入室時の言葉遣いやマナー等の指導を行う。	全教員で毎時登校時に挨拶、身だしなみの指導を行い、生活習慣の定着が進んでいる。	A	引き続き日常的に教員全員体制で取り組む。遅刻する生徒数の減少を目指す。
生活指導	⑥	定期的な校内外の巡回指導を行い、いじめをはじめとする問題行動の未然防止に努める。	教員、保護者の肯定的な回答は 90%以上である。	B	生徒の回答の中に、否定的な回答も存在するため、解消することが出来るよう全力をあげて組織的に取り組む。
	⑦	各顧問の創意・工夫ある指導のもとで、生徒の自主的・自発的な参加による部活動や学校行事の活性化を図る。	目標をもって熱心に取り組んでいる生徒が多いことが、生徒、保護者の肯定的な回答が高い点からうかがえる。生徒会を中心に、各委員会が積極的に活動し、達成感や自己有用感を醸成できた証である。特に生徒会は、考查期間前の勉強会（SSC）が多くの生徒に良い影響を与えたとして、東京都教育委員会から表彰され継続して活動している。	A	更に生徒の自主的な部活動、委員会活動が活性化するように外部団体との連携を視野に入れた検討を行っていく。
	⑧	避難訓練をはじめとした防災教育やセーフティ教室等の安全教育を充実させ、安全・安心な学校づくりを引き続き行う。	地元警察署や専門医等を活用して、生徒が自身の身を守る力を養う教育活動を行っており、その成果が生徒の肯定的な回答 80%以上に示されている。	A	教員の真剣な姿勢が生徒にも良い影響を与えていると考えられる。災害時に、避難所等で、助ける側の即戦力として活動できる生徒を育成することが課題である。
	⑨	不登校や自殺防止に向けてSCやYSWと情報共有を行うとともに、家庭との連携を図り、SOSの出し方に関する指導を実践する。	教員、生徒、保護者の肯定的な回答は 80%以上である。本校教員が生徒の個別相談に多くの時間を割き、保護者と連携を密にし、個に応	B	更に一人一人の生徒に応じた相談体制をさらに充実させていく必要がある。

			じた教育活動を地道に継続していることで、高い満足度を得ていると考えられる		
進路指導	①	職業や社会の現実に対する理解を深め、自らの能力、適性に合った生き方、働き方を考えながら社会的・職業的自立に必要な能力や態度を養い、ミスマッチのない進路実現を図る。進路希望に応じたキャリア教育の推進と、地域との連携等により、生徒の進路への意識を高める。	生徒、保護者とも肯定的な回答が高く推移しており、希望進路実現に向けた生徒、保護者への情報提供が十分になされていることがうかがえる。	B	進路選択の一助となり、早期退職とならないよう、ミスマッチを無くするための情報提供を継続して行っていく。
	②	アルバイトやインターンシップなどの実社会での就労体験を奨励して早期職業意識の形成を図る。	実社会での就労経験に乏しく職業意識の低い生徒が、自己の能力や適性についての理解も不十分なまま就職活動を始め、最後まで苦労した。職業意識の形成と自己理解の促進は、今後も大きな課題になる。	A	外部人材や地域の教育力を活用し、キャリア教育を推進していく。
	③	専門性の高い外部講師を活用した都立高校生の社会的・職業的自立支援教育プログラム事業など、実践的なキャリア教育を行い、職業や社会の現実に対する理解を深める。			
	④	校内外でのさまざまな体験活動を通して、自分の存在が社会の一員として認められているという自覚を持たせ、自尊感情や自己有用感を育む。	ヨルイチは全定ともに連携して和太鼓演奏やダンス、軽音楽部の披露、祭事の運営等行う予定であったが、台風の影響により中止となった。夏祭りにはバスボム制作で活躍することが出来た。	B	引き続き、探究活動や人間と社会等、様々な地域との連携活動において生徒の自尊感情を高めることが出来るような教育活動を推進していく。
	⑤	自己分析を目的としたキャリア教育や進路適性検査を通して自己の能力や適性に対する理解を深め、社会的・職業的自立のために必要な能力や態度を自覚させ、その獲得に向けた	生徒一人一人に応じた進路実現を目的として、進路適性検査や面談を通してきめ細やかな進路指導を行った。	B	一学年の早い段階から自己の進路について興味関心を持たせることが出来るような、指導を実施する。

		努力を促す。			
	⑥	確かな職業理解と自己理解に基づき、担任と連携して保護者の意向を確認しながら指導を行い、生徒一人ひとりの能力、適性に合ったミスマッチのない進路実現を図る。あわせて、就職先での早期離職や進学先での中途退学を減らす。	全定合同による就業学習を実施し、様々な職業理解と自己の適性について学ぶ機会を設けた。	B	次年度も引き続き、同様の就業学習を行い、幅広い職業について理解を深める機会を設定する。
	⑦	本校で身に付けてほしい資質・能力（各学年の重点目標）に基づく4年間を見通した進路指導計画を策定し、進路希望に応じた進路ガイダンスの実施やインターンシップによる進路指導の充実を図る。	昨年度に続き、今年度も進路活動を行っている生徒の進路決定率は100%である。入学時より4年間を見据えた進路指導計画の下で行っている教育活動に、生徒の肯定的な回答が85%、保護者の肯定的な回答が92%と高い評価を得ている	B	引き続き、1学年から4学年まで早い段階での職業理解や自己理解を目的に進路ガイダンスを実施し、ミスマッチのない進路実現を後押しする。
	⑧	グループエンカウターの実施によりソーシャルスキルの向上を図り、社会人となる意識を向上させる。	コミュニケーション能力を高めることが出来るよう、外部人材を招聘しグループエンカウターを実施した。	B	すべての教科において、コミュニケーション能力が高めることが出来るようグループワーク等の時間を授業内で行う工夫に努める。
	⑨	自立支援チームを中心に高校生の社会的自立を目指す進路支援事業を活用し、進路意識の向上を図る。	Y S Wの就労支援を活用し、進路意識の向上を図るとともに福祉支援に関する情報も提供できるようにした。	B	今まで同様に、生徒一人一人に寄り添いながら、計画的かつ組織的に指導に当たっていく。
特別活動	①	地域に開かれた学校づくりとして、「ヨルイチ」などの地域行事や地域清掃活動への参加、和太鼓での交流及び天文台を活用した観望会など、自治体、小・中学校、関係機関等と協働した取組を行う。	ヨルイチは全定ともに連携して和太鼓演奏やダンス、軽音学部の披露、祭事の運営等行う予定であったが、台風の影響により中止となった。夏祭りにはバスボム制作で活躍することが出来た。	B	引き続き、探究活動や人間と社会等、様々な地域との連携活動を実施するとともに、学校行事以外にも部活動等で地域との交流を図ることが出来るよう様々な教育活動を実践していく。

	②	生徒が自主的・主体的に活動できるよう、部活動や学校行事の活性化を図るとともに、部活動入部率・参加率をあげる。	感染症対策を徹底し、様々な制約がある中で活動でも、目標をもって熱心に取り組んでいる生徒が多いことが、生徒、保護者の肯定的な回答が高い点からうかがえる。	A	更に部活動を活性化し、土日活動することが出来るよう、地域と連携した部活動の実施について、全定ともに検討していく。
	③	文化祭等の学校行事や委員会活動において、生徒の自主的、主体的な活動の充実を図る。	保護者の肯定的な回答が向上している。コロナ禍でも生徒会を中心に、各委員会が積極的に活動し、達成感や自己有用感を醸成できた証である。特に生徒会は、考査期間前の勉強会（SSC）が多くの生徒に良い影響を与えたとして、東京都教育委員会から表彰され継続して活動している。	A	引き続き、生徒が主体的に委員会での活動が活性化できるよう、生徒会を中心に取り組む機会と場の提供を行う。
	④	学校行事や地域と協働した取組等により、生徒の達成感や自己有用感を醸成する。	五高祭やヨルイチにおいて外部と連携した取り組みを行うことが出来、生徒が活躍する機会を創出できた。	B	次年度は更に生徒の達成感や有用感を高めることが出来るような機会を設定していく。
	⑤	地域と協働した取組により、地域の方に本校の活動を知ってもらえる機会を増やす。	学校行事において定時制の生徒の活動の場を知っていただくことはできた。	B	次年度は始業前や土日の活動においても、地域との連携した活動の場を増やすことが出来るよう検討していく。
	⑥	総合的な探究の時間、教科指導、行事等における図書館の活用と読書習慣の確立を推進する。	学校図書館の図書貸出数の割合は、本校全日制と比較して決して少なくないが、利用する生徒と全くしない生徒が両極端に存在している。	B	各教科で学校図書を活用した授業の実践に取り組み、更に推進し、読書活動の活性化とともに、それに付随するコミュニケーション力の向上に努める。
健康 づ	①	「TOKYO ACTIVE PLAN for student」に基づき、生徒自らが体力を高めていく習慣を身につけ、生涯にわたって心身の健康を保持増進することができる資質・能力を育む。デジタル	体力向上について、自主的に取り組ませるとともに運動量を踏まえた授業展開で体力向上を図った。	B	授業だけでなく部活動も含め広く捉えて計画的・継続的な指導を行うことが必要である。

く り		技術を活用した体力テストの結果の分析を行い、生徒が自身の体力向上に向け、積極的に取り組むことが出来るよう、組織的・計画的な取組を推進する。			
	②	都立高校生が将来を見据えた健康増進の取組と様々な相談に関する学習環境を整備するために、がん教育やユースヘルスケアを推進し、生徒の心身の健康づくりを支援する。	学校行事として、産婦人科医を招聘し、ユースヘルスケアを実施した。	B	様々な医療機関と連携を図り、同事業の啓発を引き続き行う。
	③	食物アレルギー対応委員会と連携し、食物アレルギーによる事故の未然防止に努める。自校調理の給食の喫食率の向上を目指すとともに、食育の実施による健康作りを推進する。	栄養士を中心として、食物アレルギー対応委員会を開催し、安全な給食の提供を目的に食育の実施に努めてきた。	B	次年度は給食提供校も交えた委員会を開催し、より安全な給食の提供とより教育効果のある食育の実施について協議する場を設定する。
	④	「エンジョイスportsプロジェクト指定校」として、外部の専門指導者と提携し、生涯を通じて各種身体運動やスポーツに親しむことができる能力を身につける。	エンジョイスportsを通して、運動の楽しさを味わわせるとともに生涯を通じて運動に親しむ習慣を育成した。	B	外部指導者と連携し、生徒が主体的に、身体活動やスポーツを楽しむことが出来るようなプログラムを実施する。
特 別 支 援 教 育 ・ 自 立 支 援	①	SCやYSWや学校特別支援教育心理士と連携を図り、生徒相談委員会を中心とした校内体制を構築し、生徒一人ひとりの悩みの相談を傾聴し、支援を行うことができるようにする。	定期的に情報共有の場を設け、生徒・保護者がSCやYSWを活用しやすい環境を構築し、安定した学校生活を実現することができた。	A	生徒一人一人に丁寧に声を掛け、変化を見逃さない指導を継続的に行う。些細な情報も共有し、全教員で取り組むことで生徒及び保護者の満足度を高める
	②	特別支援委員会を中心とした個別支援計画を作成し、生徒の心身の健康を増進する。	定期的に特別支援委員会を開催し、外部専門家と連携しながら生徒の情報共有を行った。	A	SCの複数配置とYSWが変更したため、特別支援コーディネーターと自立支援担当教員を中核として連携を強化していく。
	③	全教員が発達障害に対する理解を深め共有し、合理的配慮を有する生徒の個別の案件に対して、適切かつ丁寧に対応できるようインクルーシブ教育を推進する。	特別支援コーディネーターによる生徒の情報共有により、合理的配慮を有する生徒の特性を理解できるようになってきている。	B	来年度はインクルーシブ教育に対する理解を推進するための校内研修を実施する。
	④	発達課題を有する生徒に対し、通級やコミュニケーションアシスト講座を通して、社会生活における適応能力を培うこと	生徒や保護者、教職員にも通級やコミュアシに対する理解が浸透してきた。	B	引き続き、発達特性や課題を抱えた生徒に対する支援について研修する機会を設定する。

		が出来るよう支援を行う。			
学校運営	①	きめ細かい指導、生徒の主体的な活動を推進し、生徒及び保護者等の満足度の高い学校づくりに取り組む。	生徒の 90%、保護者に至っては 3 年連続で 100% の肯定的な回答をいただいている。	A	本校が安全に安心して学ぶことができ、その能力を十分に伸ばさせ、希望進路を実現できる学校であり続けられるよう、全教職員一丸となって努力を継続していく。
	②	管理運営規程に基づく組織的な学校運営を行い、校務分掌内の協働体制を一層充実させ、校務の円滑な運営と諸課題の解決を図る。	週 1 回程度の企画・職員会議で組織的な学校運営はかなり円滑に進んでいる。教員の学校経営参画意識は高くなった。	B	各分掌や学年の現状と課題を共有し、一つ一つ着実に解決できるよう引き続き取り組む。変化の中で機敏に対応できる校内体制を探っていく。
	③	学校いじめ防止基本方針に基づき、年 3 回の調査及び学校いじめ対策委員会を中心に、いじめの未然防止、や早期発見、早期対応に取り組む。	定期的な巡回指導に取り組むとともに、精神的なサポートを行い、問題行動を未然に防止した。いじめアンケート調査を年 3 回行い、調査結果に基づいていじめ対策委員会を行うことでいじめの未然防止につなげた。	B	規範意識等の意識を身に付けさせ、問題行動の未然防止に向けた環境を全教職員で整備をする。
	④	体罰や性暴力の未然防止に向け、計画的・組織的な教員研修により体罰・性暴力根絶に向けて全校的に取り組む。	体罰防止研修を年 3 回実施し、体罰防止について教職員の意識を高めた。	A	体罰防止研修の内容を工夫し、引き続き体罰根絶に向けて意識を更に高める。
	⑤	学校全体の部活動の活性化を図るため、地域団体と連携し、合同練習や交流試合等を行う。	校内での部活動の実施率は非常に高い。部活動に対する意欲が高いことを表している	A	更に外部団体との交流を含めた地域連携部活動について、全日制と一緒に検討していく。
	⑥	各分掌・学年・委員会等の活性化などについて理解を深め、特に若手教員人材育成に向け、OJT や校内研修の充実を図る。	若手教員への授業観察・研究授業、各分掌での業務の進め方等 OJT を進めることができた。ICT 活用、Classi や Teams 等の有効な活用が出来た。	A	授業力の更なる向上に向けた取組や、ICT 機器を有効に活用し、地域との協働に向けた取組等に関する校内研修の充実を図る
	⑦	服務事故未然防止について、クリーンデスクや個人情報の管	年 3 回の服務事故防止研修と日頃の声掛けに	B	クリーンデスクはかなり進展したが、引き続き繰り

		理、体罰や生徒への性的暴力等についてコンプライアンス研修等を実施し、更なる徹底を図る。	より個人情報の管理への意識が高まった。		返し声を掛ける必要がある。
	⑧	経営企画室の学校運営への積極的な参加を推進するとともに、学校経営計画及び予算編成指針に基づき、計画的な予算執行、施設・備品管理、学事、環境整備などについて、円滑かつ適切な進行管理を図る。	予算執行率 94%、一般需用費のセンター執行割合 56.8%など、効果的・効率的な予算執行を行えた。	B	企画室職員との日常的なコミュニケーションの場を意識して設け、風通しの良い職場を目指す。
	⑨	全日制課程と定時制課程が双方の教育活動を尊重するとともに、全定合同の教育活動を実施するなど、引き続き学校の安定化及び活性化を図る。	文化祭等の学年行事や施設の活用について定時制と調整し連携を取った対応ができた。転籍に関する協議も実施した。	B	引き続き、全定の同分掌での連携を取り、円滑に教育活動を行えるよう調整を図る。また、転籍規定について検討する。

(2) 今年度の取り組み目標と方策

	目 標	取組と自己評価	達成度	課題と対策
①	学校案内及び学校紹介動画、見やすいホームページの作成と定期的な更新等、PR方法を工夫することにより広報活動を充実させる。学校の特色等を資料としてまとめ、全員体制による中学校訪問を行い、中学校の理解を深める。	今年度、広報担当の教員の異動に伴い、ホームページの更新回数及び生徒募集対策に関する取り組みが大幅に減少してしまった。	C	次年度は担当者のみならず、教職員全員体制で行い、中学校訪問や学校説明会等を組織的に取り組む。
②	地域のお祭りの「ヨルイチ」での和太鼓演奏や運営等のサポート、消防署と連携した防災訓練等を実施し密接な地域連携を通して、地域に貢献できる人材の育成を行う。	ヨルイチが悪天候で実施できなかったが、防災訓練等に関しては地域と連携した取り組みを行うことが出来た。	B	来年度、ヨルイチや水無月祓い、夏祭りや地域と連携した教育活動を更に積極的に取り組み、地域貢献できる人材の育成を行う。
③	地域課題を解決する探究活動により、地域貢献を行う人材育成を図るといふ本校の教育方針を踏まえ、公務員を目指す生徒に対し、各自治体や専門学校と連携を図り、公務員対策講座を実施する。	全日同様スキルアップ推進校として行う教育活動について、定時制も行うことができる方法を模索した。	B	来年度は各種検定試験の取得に、定時制の生徒も積極的に取り組む機会を提供する。
④	理解できていない部分を明確にし、分かる授業を実践する。特に国語・数学・英語の基礎学力の定着を図る。	観点別評価を踏まえ、Forms の活用やICT機器を積極的に活用し、生徒にわかる授業を実践できた。ICT 機器等の視聴覚教材を活用した授業を	B	外部を活用した実施体制への課題は残る。効果的な基礎学力の定着を更に模索する C4th やリ・アテンダント等のシステムを教職員全員が

		行ってきた結果、生徒の理解度が向上した。		活用できるようにする。
⑤	生徒情報の一元管理、基礎学力の定着、日常的に生徒がＩＣＴ機器を活用する機会を設けるなど、ＩＣＴ機器の特長を生かした教育活動の定着を図る。	教員はC4th や教育ダッシュボード、統合型校務支援システム等の活用や生徒は Forms の活用や Teams 等のＩＣＴ機器を積極的活用を推進した。	B	次年度は DX ハイスクールの環境も整うため、教職員、生徒ともに ICT 機器を積極的に活用できるように努める。
⑥	自主的、自発的な活動を通して、豊かな人間性や協調性、リーダーシップなどを醸成するよう、部活動への積極的な参加を促す。	感染症対策を徹底し、様々な制約がある中での活動でも、目標をもって熱心に取り組んでいる生徒が多いことが、生徒、保護者の肯定的な回答が高い点からうかがえる。	A	引き続き部活動を積極的に行い、対外試合等にも参加できるように、他校や地域と連携を図る。
⑦	ライフ・ワーク・バランスの推進に向けて、各分掌、各学年及び各教科で校内業務の整理と効率化を図る。 会議の時間短縮を推奨し、年休や育児・介護休暇等の休暇取得がしやすい雰囲気づくりや同僚性を育むなど、相互に声を掛け合うことが出来る、温かい職場環境づくりを推進する。	業務効率化に向けて様々な計画、業務の整理を行った。教員の意識 64.7% となった。業務の効率化と精選、ならびに休憩時間の積極的な取得を推奨した。	B	働き方改革の一環として、オンとオフの切り替えが出来るような校務運営を行う。特定の教員に負担が偏らないように、学校全体で組織的な業務運営を行う。
⑧	授業力の向上、探究活動の指導や観点別学習状況の評価などについて理解を深め、実践を通じて指導方法などが定着するよう、OJTや校内研修の充実を図る。	若手教員への授業観察・研究授業、各分掌での業務の進め方等OJTを進めることができた。ICT活用、Classi や Teams 等の有効な活用が出来た。	A	授業力の更なる向上に向けた取組や、ICT 機器を有効に活用し、地域との協働に向けた取組等に関する校内研修の充実を図る

【達成度】 A：達成できた。今後も継続する。達成率 80%以上

B：おおむね達成できた。より良くなるよう改善を図る。達成率 50%以上

C：達成できていない。改善が必要である。達成率 50%未満

(3) 数値目標

	目 標	令和4年度	令和5年度	令和6年度	課題と対策
①	生徒の授業満足度 80%以上	94.3%	96.6%	91%	組織的な授業改善を引き続き図る。
②	進路決定率 70%以上	100%	100%	100%	就職希望内定率 100%を次年度も目標として継続するとともに、キャリア教育を更に充実させる。

③	遅刻者数		384	235	遅刻の常習化を断つ粘り強い指導等を行い基本的な生活習慣の定着や規範意識の醸成を全教職員で引き続き取り組む。
④	中途退学者 10 名以内	2 名	1 名	0 名	引き続き個に応じた丁寧な指導を展開し自校に対する強い帰属意識を醸成する。
⑤	生徒の地域行事等への参加に対する地域の理解 65%		45.9%	44.0%	地域行事積極的参加と拡大
⑥	本校地域活動に対する地域の認識 50%		37.5%	44.0%	本校生徒の地域連携活動の推進と広報活動の充実
⑦	地域の本校生活指導への理解 70%		57.8%	56.0%	登下校のマナーや交通ルールの順守、挨拶や言葉遣いに対する周知徹底
⑨	教職員の自立支援チーム派遣事業への理解 100%		100%	100. %	自立支援チーム継続派遣校についての理解推進